

詩と詩論の同人誌

「踐草詩舎」創刊

洲浜 昌三

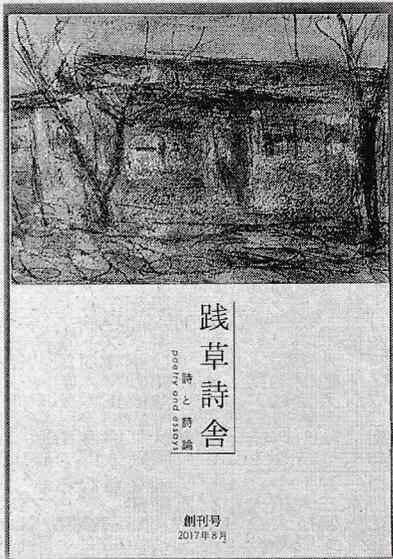
1956年に出雲で創刊され、60年の歴史を重ねた詩誌「光年」が、151号を最後に終刊となったのは今年の3月だった。

高齢化や若者の文学離れなどで、全国的にも同人誌の廃刊がつつくなかで、「山陰詩人」「石見詩人」とともに島根の詩壇を形成してきた「光年」の終刊は残念なことだった。

日常の感動 問いかける

しかし、嬉しいことに8月初旬、松江で装いを新たにした詩誌が誕生した。新生詩誌の名前は「踐草詩舎」。

鄙ひた田舎の質素な家へ草



「踐草詩舎」創刊号の表紙

さらに詩誌の表紙などには、伯父の遺作を載せる予定だという。楽しみである。

「編集のあとに」で、すとう氏は新詩誌へ向かう姿勢を次のように述べている。

「『光年』の長い年月の歴史の上に、何を築き上げるか、確たるマニフェストはない。ただ、日常生活における些細な感動を、詩のことばと形によって、まずは自らが認識し、さらには他の人にも問いかけたい。それが、新しい自分の発見になり、新しい世界の認識になることを願って」

創刊号には6人の詩や随筆、評論などがある。すとう氏の「ゆきやまを紹介する。「やねからおちて／やまになるゆき／きのう きょうと／はれたので／どんどんやせていき／ゆうがたには／にぎりこぶしほどになる／あすのあさまでに／ぼくをのこして／なくなってしまうのでは／だれのせいでもなく／だれもなぐさめてくれないけど」

落雪の変化を己に重ね、詩が霧のように立ち上がり広がり、人生を照射する。三方純

子氏は、「七月」で奥深い暗示を鋭利な言葉で詩に結晶し、土谷令生子氏は、「母」で、屈折した思いを自在な時間軸の移動で展開、三方元氏は、切れ味のある現代俳句5句、異色は中野俊雄氏の「写真掌編」。1台のカメラの写真と散文「亡父のカメラ」は、文も感銘深い。堅苦しい現代詩の壁に穴を開け、一陣の風が通り抜けた爽やかさがあつた。

その重鎮は坂口簾氏である。「光年」の主宰者でありながら詩集がなかった。

た故・喜多行二氏の「全詩集成一」を3月に刊行し、創刊号でも、喜多氏の初期の詩から、その原型や方法論を綿密に検証して論述。読み応えがある。実作と批評は文学の両輪である。批評の健在は、何よりも嬉しい。

(日本詩人クラブ会員、四国詩人会理事)

「踐草詩舎」創刊号は、

〒690-0015、松江市上乃木5の11の46、周藤方、踐草詩舎発行。